



ノーベル賞作家大江健三郎氏の自筆原稿、東京大学文学部に寄託
～「大江健三郎文庫（仮称）」設立へ～

1. 発表者：

大西 克也（東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長）

2. 発表のポイント

- ◆ 東京大学出身で、日本で2人目のノーベル文学賞作家大江健三郎氏の自筆原稿などの資料が東京大学大学院人文社会系研究科・文学部へ寄託されました。
- ◆ 寄託資料は、自筆原稿、校正ゲラなど、約50点で大江氏の原稿がまとまったかたちで公的機関に寄託されるのは初めてのことです。
- ◆ 自筆原稿は合計1万枚を越え、同一作家の自筆原稿のコレクションとしては屈指の規模となります。
- ◆ 今後、寄託資料を保管・管理する「大江健三郎文庫（仮称）」を東京大学大学院人文社会系研究科・文学部内に設立する予定です。

3. 発表概要

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部（以下、東大文学部）は、大江健三郎氏（以下、大江氏）代理のご家族から大江氏に関する資料を寄託され、受入れました。

2021年1月21日、寄託契約締結式が行われ、大江氏代理のご家族と大西克也研究科長・学部長との間で契約書が取り交わされました。寄託に関する東大文学部からの提案に基づき検討を重ねて参りましたが、このたびご承諾を賜り、契約締結に至ったものです。

東京大学出身で、日本で2人目のノーベル文学賞を受賞した大江氏の自筆原稿がまとまったかたちで公的機関に寄託されるのは初めてのことです。また東大文学部において、文学者の自筆原稿を中心としたコレクションを受入れるのも初めてのことです。

今後、東大文学部は、「大江健三郎文庫」（仮称）を設立し、大江文学を中核とする日本近代文学の世界に向けた研究拠点として位置づける予定です。

4. 発表内容

2021年1月21日、東京大学法文2号館にて、大江健三郎氏の資料に関する寄託契約締結式が行われ、大江氏の代理としてご家族と大西克也研究科長・学部長との間で契約書と目録が取り交わされました。

大江氏は、1959年に東京大学文学部仏蘭西文学科を卒業、在学中から作家として活躍しました。1994年には「詩的な力によって生と神話が凝縮した想像世界をつくり出し、読み手の心をかき乱しながら現代人の苦境を描き出した」との理由により、川端康成氏に次いで、日本で2人目のノーベル文学賞を授与され、国内外で高く評価されています。

今回の寄託にあたっては、講談社刊『大江健三郎全小説』の完結を受け、株式会社講談社

および株式会社文藝春秋に保管されていた資料をしかるべき機関に移管し、文学と学術の発展に寄与したいと願う関係者から申し出をいただき、1年近く検討を進めてきました。寄託条件に関して大江氏の合意が得られたことから、寄託契約書の締結と資料の受入れを行いました。

寄託された資料は、株式会社講談社、株式会社文藝春秋および大江氏のご自宅に所蔵されていたものです。大江氏の初期作品から後期作品にいたる自筆原稿、校正ゲラなど、約50点で、合計1万枚を越え、自筆原稿がその大半を成します。これは、同一作家の自筆原稿のコレクションとして屈指の規模です。具体的には、第38回芥川賞候補作「死者の奢り」(1957)〈資料1〉、「空の怪物アグイー」(1964)といった初期作品から、『同時代ゲーム』(1979)〈資料2〉、『「雨の木(レイン・ツリー)」を聴く女たち』(1982)といった中期の代表作、さらには、3部作『燃えあがる緑の木』(1993 - 1995)〈資料3〉、『晩年様式集(イン・レイト・スタイル)』(2013)にいたる多様な作品から構成されています。

このように、大江氏の原稿がまとまったかたちで公的機関に寄託されるのは初めてのことです。また東大文学部には、貴重図書、所属教員や寄贈図書のコレクションなどの文庫が多数存在しますが、文学者の自筆原稿を中心とするコレクションの受入れは今回が初めてとなります。

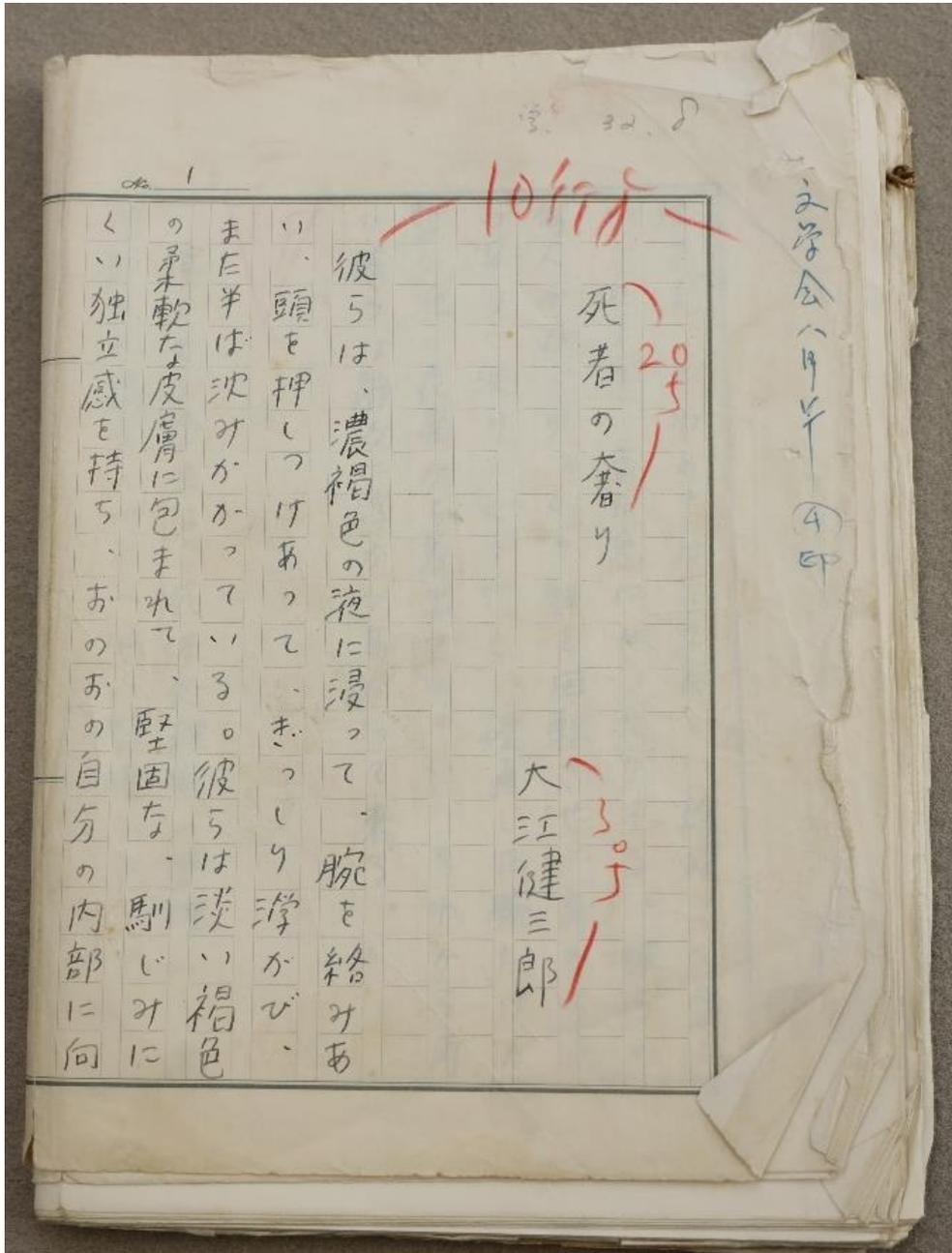
東大文学部では、この貴重な資料を東京大学のみならず人類の文化資産として受入れ、基礎的な整理と研究・管理体制を整えた後に、適切な形で研究資料としての公開を検討しています。そのための組織として「大江健三郎文庫」(仮称)を設立し、大江文学を中核とする日本近代文学の世界に向けた研究拠点として位置づけたいと考えています。同文庫は、東大文学部の現代文芸論研究室、日本語日本文学(国文学)研究室、フランス語フランス文学研究室が中心となって運営します。

今後、同文庫の設立により、日本文学のみならず、世界文学、草稿研究といった観点からも、研究の進展が期待されます。

5. 添付資料（原稿の写真）

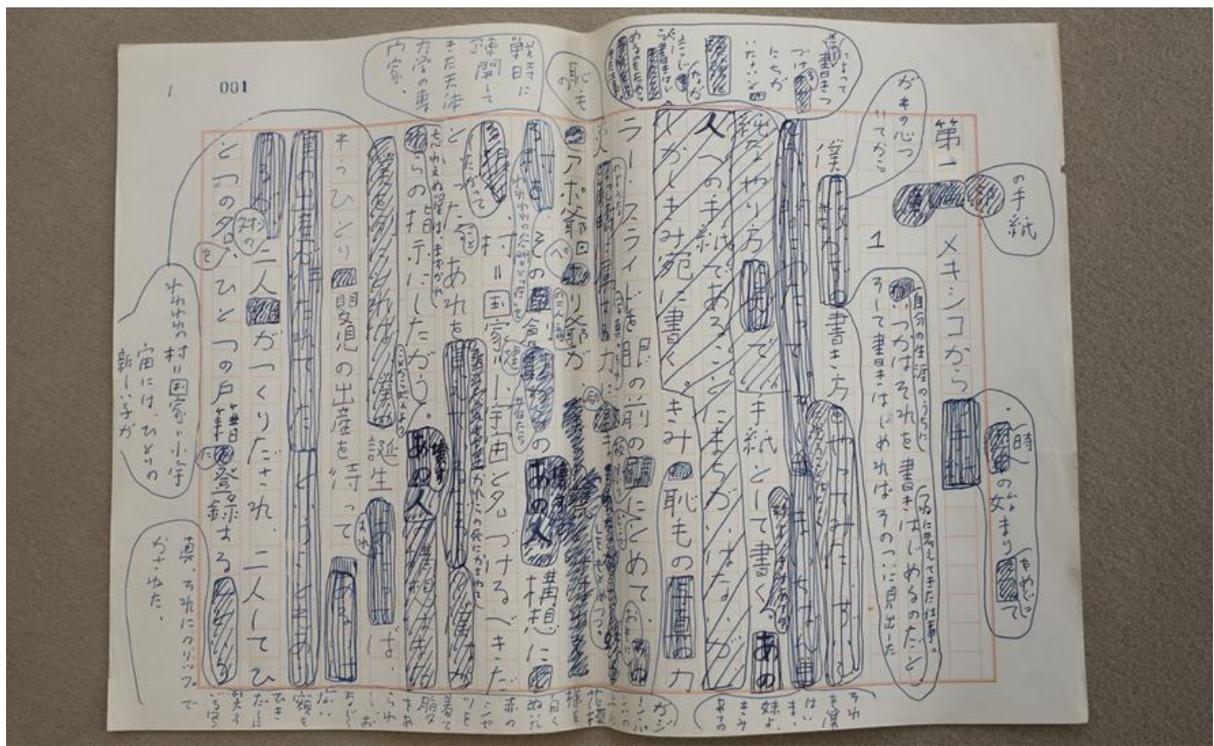
*資料写真については、本件の報道以外の目的での無断利用はご遠慮ください。

写真提供：東京大学文学部・大学院人文社会系研究科



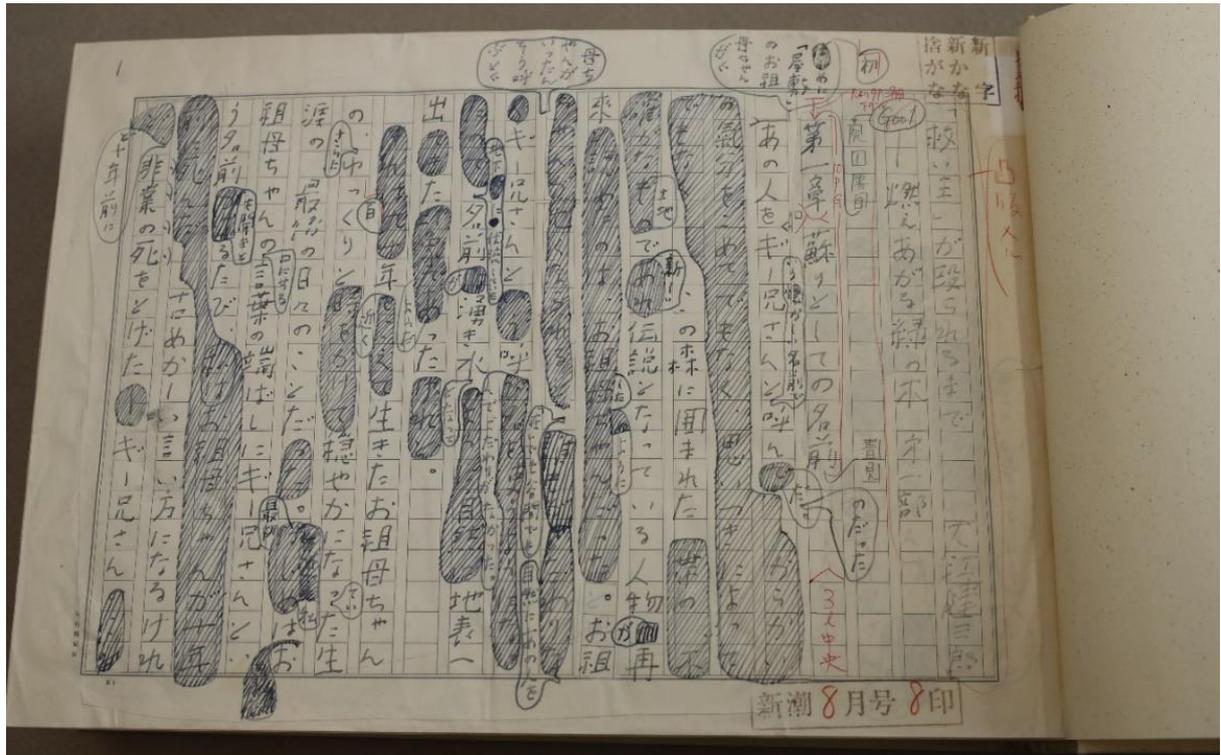
〈資料1〉「死者の奢り」（1957）

「死者の奢り」（1957年）の自筆原稿。大江氏が本学文学部在学中に執筆した短篇。初出は「文学界」1957年（第11巻）8号。最終稿では「死者たちは」と始まる鮮烈な冒頭部分は、この原稿では「彼らは」という表現が使われている。



〈資料2〉『同時代ゲーム』(1979)

『同時代ゲーム』(新潮社、1979年)の自筆原稿。1976年に客員教授として滞在したメキシコ体験を経て執筆され、様々な議論を呼んだ長篇小説。「第一の手紙」の最終稿のタイトルは「メキシコから、時の始まりにむかって」であるが、ここでは「メキシコから、時の始まりをめぐって」となっている。



〈資料3〉『燃えあがる緑の木 第一部』(1993)

『燃えあがる緑の木 第一部 「救い主」が殴られるまで』(新潮社、1993年)の自筆原稿。1993年から1995年にかけて発表された三部作の第一部をなす。「あの人をギー兄さんと呼んで」という一節から始まる冒頭箇所に加筆・削除が次々と施されている様子がわかる。なお、最終稿は、『『屋敷』のお祖母ちゃんが、あの人をギー兄さんという懐かしい名前で呼び始められた』という一節から始まっている。